

朝鮮三国の山城と鞠智城

田中 俊明（滋賀県立大学名誉教授）

朝鮮三国とは、高句麗・百済・新羅の三国を指す。この三国では山城が大きく発展した。ただし三国それぞれの特徴は異なる。これらの地域の山城のいくつかをとりあげ、その特徴について述べ、鞠智城を考えるときの材料を提供したい。

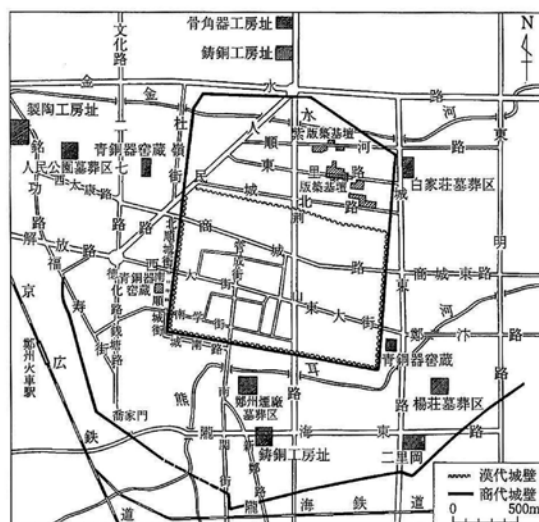
1. 夫余

漢族の地域において、城郭は古くから造られている。中原地域の河南省には殷王朝の時期にあたると考えられる紀元前2千年紀の城とみられる偃師商城・鄭州商城などが残り、夏王朝までさかのぼる可能性もある。しかしそれらは、基本的に平地の土城である。黄河流域を中心にした中原の黄土地帯において、同質土で版築する（夯土）土城が一般的であり、現在までよく残っている。しかし山城を見ることはほとんどない。山城は周縁地域にみられるもので、ここにとりあげる中国東北地区ではむしろ山城が基本である。なお、中原地域以外では版築は粘質土を交互に挟む必要がある（例えば時代は降るが、遼の上京城〔内蒙古巴林左旗〕などにもみられる）。

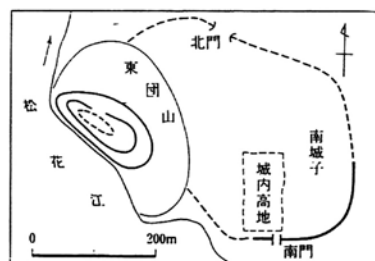
朝鮮三国をとりあげる前に、「東夷」世界のなかで最も先進的で、漢文化にも近い夫余についてみておきたい。

夫余の当初の本拠地とみられるのは、吉林省吉林市である。市街の中心部をとりまくように第二松花江が流れるが、その東岸に東団山がある。海拔252m（比高60m）の独立丘陵である。楕円形の土石混築の城壁を三重にめぐらしている。『魏志』夫余伝に「城柵は円形に作り、牢獄に似ている」とあり、それに該当するとみられる。吉林市の西北にある九台県でも小規模の円形の城址が確認されており、夫余の遺構ではないかとされている。

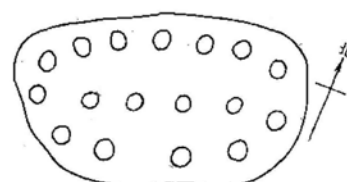
吉林省九台県は、吉林市と農安市との間にあるが、その県城の北80kmの上河湾鎮に七基の山城がある。康家興「吉林九台上河湾考古調査」（『考古』1961年3期）によれば、1959年8月に吉林省文化局と九台県文化館・上河湾人民公社文化館の共同で、現地調査を行っており、また1960年春には長春地区文物普查隊が調査をしている。その後吉林省文物志編委会『九台県文物志』（同会、1986）の作成にあたって、



151 鄭州商城
(宮本一夫『中国の歴史01 神話から歴史へ』講談社、2005)



東団山城平面図



図二 樟樹嘴子西山山城平面示意图

80年代にも調査をしているようである。それによれば、城内に多くの円形の坑があり、住居址かとみられる。従って、高地性の集落を城壁で囲んだものというべきである。城壁は、土・石・土石混築のものがあるが、文字どおりの柵は確認されていない。城柵というのはそういう成語であって実際に木柵などが構築されていたかどうかは別の問題である。

2. 高句麗の山城

高句麗は夫余から出たとみることがあり、高句麗人自身もそのように言っている記事がある。しかし現実には、民族的系統はなく、先進大国の夫余に対する意識が強く、その当初の本拠地（吉林市）を奪取したあと、夫余と同族であると主張するようになる。

高句麗では多くの山城が造られているが、基本的には居住性がない。戦時にやや長期に立てこもることがあり、その痕跡が残ることがあるが、通常は近傍に居住空間があり、山城はいわゆる「逃げ城」である。その点は夫余とは異なるものであり、城郭史の系譜としては異なるというべきである。

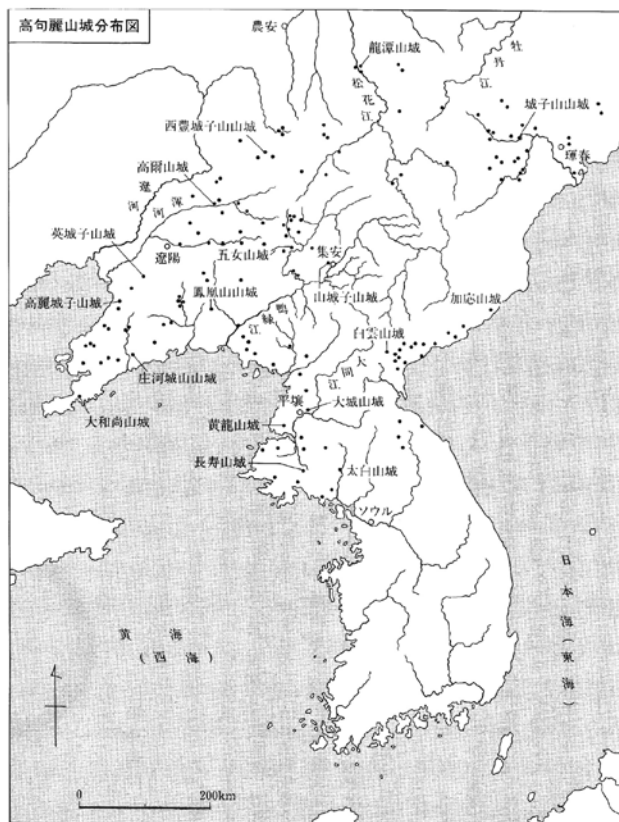
高句麗は、広開土王の領土拡大をへて、5世紀の後半、長寿王の時代に最大版図を実現した。すでに王都は平壤に遷っており、それを中心にすれば、西北は遼河まで、東北は現在の吉林省吉林市と延辺地区琿春を結ぶラインまで、南は朝鮮半島の中部、韓国の忠清南道の北部から慶尚北道の北部を結ぶラインまでおよぶ、きわめて広大な領土となった。そのご南方の境界は、新羅の成長によってしだいに後退していくが、西北・東北の領土はほぼ最後まで維持される。この広大な領土を支配するうえで、高句麗は各地に山城を築き支配の拠点とし、かつ防御施設とした。山城を中心とした支配は高句麗文化の大きな特徴であり、百済や新羅にも影響を与えている。ここではいくつかの山城をとりあげ具体例に即して高句麗の防御体制や地方支配の実態について述べることにしたい。

高句麗の発祥の地は、鴨緑江中流とその支流渾江の流域である。最初の都は卒本（忽本）といい、現在の遼寧省桓仁県にあたる。

高句麗の王都は、その後、中期＝国内（吉林省集安市）、後期＝平壤（北朝鮮）と変遷するが、平壤時代の後半を除いて山城と近傍の居城とのセット関係で成り立つ。卒本時代の山城は桓仁鎮の北東



朝鮮三国王都の位置と変遷
●は王都，数字は遷都年を示す。境界線は510年，（ ）は現代地名。



(『高句麗の歴史と遺跡』)

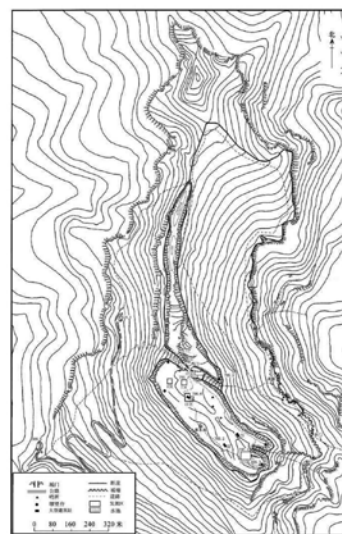
約8km、渾江の北側に位置する五女山城である。海拔820mで、玄武岩の岩壁がそそりたつ勇壮かつ怪異な山である。頂上部は平坦で、池（天池）とふたつの井戸がある。城壁は頂上部から200mほど降りた東側山腹を南北に弧形で1000mほど走り、南端で西に折れて小点将台下の稜線をのぼるかたちでさらに120mほどつづ



く。両側から積み上げる夾築で、外側の高さは6～8m、内側は1～2mである。外壁は大きい石を2～3層積み、その上に奥がせまい楔形のやや小さい石を整然と積み上げる。高いところでは27層におよぶ。下段は階段状に、少しずつうしろにずらして積むが、それは高句麗の築造法の特徴である。



遺物は、発掘の際に多量出土し、例えば袋状鉄斧などは紀元前後までさかのぼりうるもので、高句麗前期の遺物を含んでいることはまちがいない。これを通して、五女山頂上部が高句麗前期の活動拠点であったことが確認できる。それをふまれば、城壁の築造法や構造が高句麗的である五女山城が高句麗の山城であることは、もはや問題ないといえる。ただし、現存する城壁がはたして高句麗前期までさかのぼるものかどうかは、なお未確認といわなければならない。山城としての使用開始時期と、現存城壁の築造時期は、かならずしも同じではない。その点でいえば、桓仁・集安地域の山城を高句麗「早期」の山城ととらえ、その築造法を「早期」のものとみなして、山城築造法の変遷を考えることがあるが、それは方法的に問題である。この地域の山城は確かにほとんど前中期の重要な山城といえようが、そのまま現存城壁の年代とみるのは短絡である。五女山城の場合も、東門付近の城壁は、積石塚の基壇部の発展過程などもふまえると、3～4世紀までくだらせて考える必要がある。この特異な地形を擁する山城は、頂上部を守るためには、亀裂部分を守れば十分で、絶壁をよじ登ることはほとんど不可能である。まさに天然の要害であり、ことさら城壁を築かなくてもよいとも思える。あるいは当初は、城壁を築かなかったかもしれないのである。

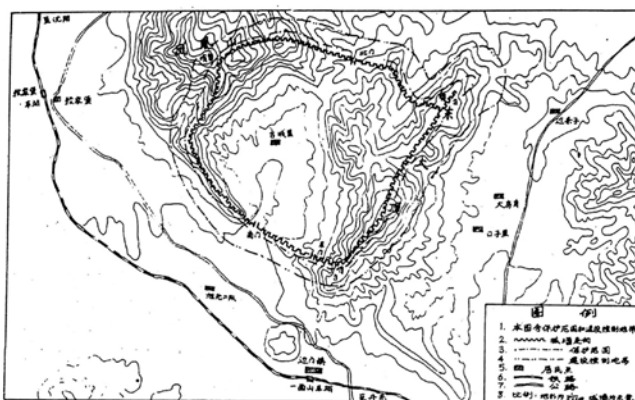


このように、城壁そのものについては、なお保留せざるをえないが、山城としては高句麗前期までさかのぼるとみてもおかしくない。そのいっけん異様な山容は、霊なる山として畏敬の念を与えるにじゅうぶんでもある（遼寧省文考所編『五女山城』文物出版社、2004）。なお近傍の居城といえるの

は、漢の玄菟郡の県城に由来するとみられる西側の下古城子土城ではなく、東側の喇哈城とみるべきである（『広開土王碑』に「忽本の西の山の上に築城した」）。高句麗の住地には前107年に武帝が玄菟郡を置き、高句麗はその圧力に対する抵抗のなかで力をつけ、興起していった。県城を奪い取った高句麗は、それを利用するとともに、近くに山城を造った。

高句麗山城は、特に遼東方面において、名の残る巨大山城が多い。周長2kmを越えれば大型山城というが、そうした大型が多い。名が知られるのは、隋・唐の侵略の際の記録が残るからである。その中のいくつかをとりあげてみる。まず最大拠点となった烏骨城である。烏骨城に比定されてほぼまちがいないのが、鬲河をさかのぼった鳳城市にある鳳凰山山城である。

鳳城市街の南に海拔930mの鳳凰山がある。遼東随一の名山とされ、奇岩峭壁のつらなる勇壮な山である。この鳳凰山とその東南の海拔765mの高麗山との稜線をつなぐかたちで、ふたつの山がつくる谷というより小盆地を囲んでめぐる巨大な山城が鳳凰山山城である。自然の岩盤を利用しており、すべて城壁をつくっているわけではないが、全長15～16kmある。谷は北東から南西にかけては

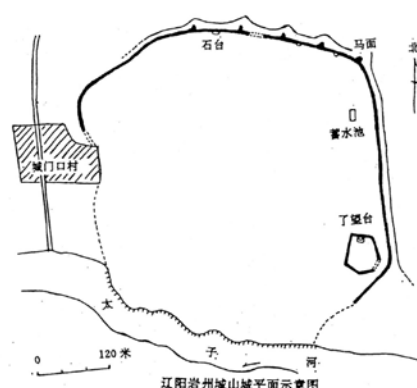


るが、南西側が大きく開いている。両山からのびる稜線は麓に達して低い丘陵となるが、そのあいだの平地をむすぶあたりに南門址があった。正門である。現在は、東半に軍の倉庫がたち、よく確認できない。いっぽう北門址は両山の鞍部で、かなり高い位置にある。北へぬける通路のかたわらに石積みが残る。その門址の左右の稜線に、整然と積み上げた城壁がよく残る箇所が多い。急角度の傾斜面で、もともと連続して積んでいるわけではないが、残りのよいところで高さ6mほどある。北門をぬけると、大きく谷がひろがっており、北から登るのは容易ではない。

『翰苑』注に引く『高驪記』は、焉骨山とよび「国の西北にある。高句麗人は屋山という。平壤の西北七百里にある。東西の二嶺は、千仞の高さで壁立する。ふもとからいただきまでみな蒼石である。岩山が高くそびえるようすを遠望すれば、荊門の三峡に似ている。上には草木もないが、ただ青松が生えており、幹は雲表に達する。高句麗は南北の峡口に段を築いて城としている。この城は夷藩の枢要のところである」と詳述している。現状とかわらない状況がよくうかがえ、伝聞ではなくじっさいの見聞であろう。「夷藩の枢要」とあるのは、そのとおりで、645年の唐の侵攻のさいに、安市城の救援にむかって逆に唐軍にとらえられた高延寿・高惠真是、安市城を攻めあぐねる太宗に次のように進言している。「烏骨城の裨薩は年老いて堅守することができません。兵を移してそれに臨めば、朝に至って夕べには勝つことなるでしょう。とおしみちの小城も風になびいて降伏するはずです。そのあとに食糧を収め、鼓行して進めば、平壤はかならずや守ることができません」と。裨薩（裨薩）は大城に置かれた地方官で、都督にあたる。他の城・小城とは格がちがう。ここがおちれば、付近の小城が戦わずして降するというのも、けっして誇張といえない。

石築山城の例をもうひとつあげる。高句麗の西への進出は、蘇子河から渾河を経て玄菟郡に向かう

ルートと、太子河から遼東郡に向かうルートが2大主要路である。太子河は本溪の西のダムをすぎると大きく屈曲して東北流し、大きな岩盤にぶつかってふたたび西に流れをかえる。その岩盤の上に燕州城がある。東南に高く、西の城門口村にかけて低くなる独立丘陵の上で、太子河に面する東南側は絶壁のため城壁を築かないが、ほかは堅固に積み上げられた石塁で、周長約2500mある。西南の門址は集落のなかで最近調査された。すぐ西に小高い丘陵があり、城壁はその上をのぼり、西北の門址にむかっていったんさがっていく。ゆるやかな傾斜をあがって



いく北壁は高さ7m前後あり、幅4m余ある。外側に雉が5ヶ所以上あり、それとは位置をずらして城壁に登る城台が5ヶ所ある。それぞれ約70mの間隔をおいている。雉は幅5m、長さ5.30mで、下段は大きな切石を階段状に積み、角をまるく整えている。東南の最高所は海拔200mで、後代の烽火台址があり、その周囲を石塁が囲んでいる。城内からは、太子河下流方面から攻めてくる敵を見通すのは絶好であるが、またぎゃくに城外から城内はよく見通せ、隠れようがない。

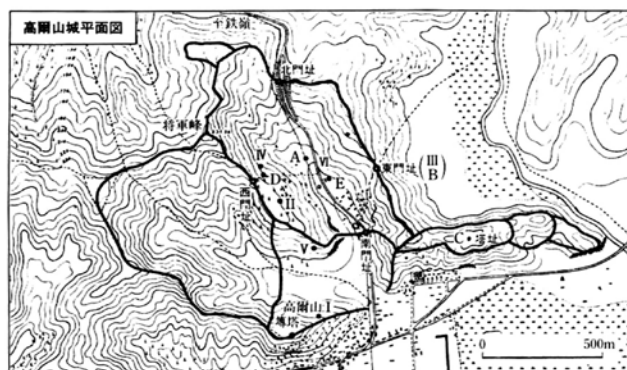
燕州城は、高句麗の白巖城にあてられる。白巖はまた柏崖・白崖・白石とも表記する。高句麗には蒼巖城（わたしは五女山城とみる）もあり、岩盤に立地する山城の印象による命名かとみられる。唐は巖州とし、遼もそれをうけて巖州とした。燕州はそれと音通であり、つまり巖州城ということである。中国史書では、『隋書』にみえるのが早いが、『三国史記』には、547年に改築し、551年には突厥が来攻したとみえている。高句麗が遼東郡治（平地城）を奪取したあと、その背後のまもりとして築城したものと思われ、早くても4世紀末か5世紀はじめのこととみることができる。『旧唐書』高麗伝では「山に因り水に臨み、四面險絶す」とする。この城が攻撃を受けたのは、645年であった。城主は孫伐音（孫代音）で、陰曆5月17日、唐軍が遼東城を下すと、降伏の意志を表明したが、すぐにそれを翻し、唐軍は28日から攻撃した。烏骨城ほかから救援が来たが、6月1日には降伏した。攻撃のさいに、皇帝太宗は西北から、李勣は西南から攻めた。西北の城外はゆるやかな傾斜をなし、攻撃しやすい。城壁をとくに高く積み上げているのはそのためであろう。降伏したとき、城内には男女1万余人いたという。他城からの兵も多かったのである。太宗はここを巖州とし、城主を刺史とした。ただし唐軍の退却後は、すぐに高句麗の手にもどることになり、唐も翌年春には州を廃している。

土築山城の例もあげる。難攻不落で有名な安市城にあたるのが、海城の英城子山城である。石築か土築か、どちらが堅固かといえば、どちらも堅固である。山城はどこも難攻不落と言ってよく、陥落するのは内応者がいるなどによる。どちらが選ばれるかは、材料調達の問題であろう。

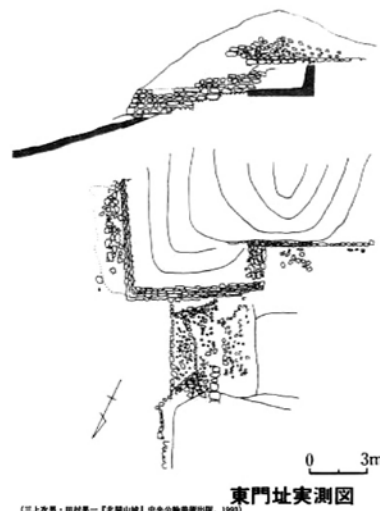
海城市街から東南に7kmの英城子村にある英城子山城である。析木・岫岩へ向かう公路のすぐ東で、ちょうど平野部から山地にはいる入り口をおさえるかたちになっている。集落は城の西南の門をはさんで内外にわたっている。門の両側は版築の土塁を下から高く築いており、そのまま稜線上につづいていく。全体が土城で、周長4kmある。東北の山頂から西南のふたつの谷をとりこんで稜線上に土塁が走るが、ふたつの谷のあいだの中央部においてくる稜線にも土塁を築き、ふたつの部分にわけている。門は西北・東北・東南にもある。西北側には外郭があるようにみえる。

安市城は645年に唐の猛攻をうけた。遼東城・白巖城を降伏させたあと、6月20日に安市城に到着し、攻撃をはじめた。攻撃の前に太宗は、「安市は城が堅固で兵も精鋭である。城主は勇敢で、蓋蘇文の乱に際しても服さず、蓋蘇文も下すことができなかった」として、建安城を先に攻撃する案をもちかけたが、李世勣らの反対をうけ、やはり安市をせめることになったのであった。高句麗ではすぐに、北部の靺鞨の高延寿と高惠真が、東南方面から救援軍15万を率いて安市城に近づき、東南8里に陣した。唐軍は李世勣が安市城の西嶺に陣して高句麗をさそいこみ、長孫無忌が山の北から狭い谷にそってうしろにまわり、太宗は北山に登って観望した。この会戦で高句麗軍は大敗し、両将は唐に寝返った。この北山はその勝利のきっかけ唐が駐蹕山と改名した。李世勣が最初に陣した西嶺や太宗の陣した東嶺など、それぞれ該当する山もある。

もう1例、撫順の高爾山城をみる。基本土築で、一部石築である。高句麗山城で最も早くに発掘調査がなされた。まず1940年に池内宏・三上次男らが東城の住居址・門址および小城の塔址を中心に、ついで44年に三上次男らが東城の西門址を中心におこなった。56年と63年には撫順市文化局文物工作隊が地表調査して現況を確認した。さらに83年から3年にわたり公園化計画と関連して、撫順市博物館と遼寧省博物館が共同で、東城と南衛城6ヶ所の発掘調査をおこなった。



高爾山城は、西北の海拔230mの將軍峰を最高峰とするいくつかの峰にまたがっており、その頂上から南にのびる稜線上の城壁を境にして、東城と西城とにわかれる。東城が主城であり、高句麗時代の築造で、遼代以後に西城、さらに両城の南側に南衛城、東城の北に北衛城が築かれた。城壁の残高は2～5mで、総長4kmほどになる。東城の南門址は両側に高さ10mの版築土塁が残り、西側には南に26m離れて高さ約5mの版築土塁がある。これらは甕城をなしていたものとみられる。南門址西側に水溝があり、大きな石が残っていた。そこに水口門があったはずである。北門址は両側の城壁が直角にのびる角にあるが、採土のため構造はよくわからない。



門址は東西にもある。40年に発掘された東門址は、門の両側が石塁で、南側がよく残っていたが、階段式に切石を5～6段積む。石積み内部には小さい割石をつめていた。

3. 百済の山城

百済もまた、伝承的には高句麗とともに夫余から出た、としているが、現実には、系譜関係はない。高句麗は貊族であり、百済は韓族である。民族系統が異なるといえる（ただ先進大国の高句麗と敵対する必要が起こり、対等であると政治的に主張するようになった）。山城についてもほとんど関係がない。百済の山城は基本的に土築であり、前面下段に石築をすることが多い（列石）。規模は2km以

下の小さいものが多い。

百済は、漢城（ソウル江南）に発祥し、475年に高句麗の攻撃をうけて漢城王都が陥落し王が殺され滅亡するが、477年にまったく別の場所、熊津（現在の公州）で復活した。そこは急遽おちついた先なので、その後計画的に都づくりをして遷都した。それが結果として最後の都となった泗泚（現在の扶余）である。この王都の変遷に即して百済史を区分すれば、前期漢城時代→中期熊津時代→後期泗泚時代、ということになる。泗泚への遷都は538年であり、滅亡は660年である（そのあと復興運動が3年づく）。

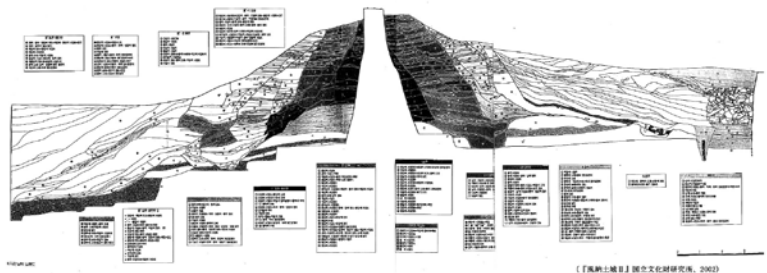
王都の城についてみておけば、高句麗とは異なり、漢城時代には平地の城のみで、熊津・泗泚時代には、山城が造られる。漢城時代は、ソウルを流れる漢江が南北に流れる地点の東にある風納土城と夢村土城に王宮があったと考えられる。なお、王宮の位置は、全時代を通して、まだまったくわかっていない。

風納土城は、ほぼ長方形で、ほんらいは3500mはあったとみられる。平地土城であるが、城壁築造については、山城を考えるとときにも資料となる。西壁は漢江の洪水などで流失し、南壁も開発でかなり失われた。1997年の発掘を通して、城内で環濠聚落が確認され、環濠が3世紀前半～中葉に廃棄されたとみられることから、城壁の築造はそれ以後と考えられるようになった。さらに1999年に城壁の調査が実施され、遅くとも3世紀を前後する時期に築造が完了しているものと考えられるようになった。

発掘を通して、土城の幅は40mに達することが確認され、高さもほんらい12mほどあったと考えられている。1964年に城内が試掘調査されたことがあるが、その出土土器を通して、築造年代は限定できず、ただ、夢村土城と並行する時期に用いられたことが確認さ

れるのみであった。2011年に漢城百済博物館の展示のために、三回目の断面調査がなされた。この時には、その内部や下層から土器が発見され、年代を限定できるようになった。その結果、3世紀の中後半に着工して、4世紀前半の以前に初めて完成され、4世紀末と、5世紀前半に増築されて規模が拡大された、という。初築時には高さ10.8mあったと推測され、増築時には13.3mまでになったとされる。延べ人数138万人の大規模工事であったとみられている。

夢村土城は、オリンピックの施設がその一帯に建設されることになり、1983年から発掘調査がはじめられ、遺構の確認によって89年まで継続し、その後はオリンピック公園として復元整備された。築造年代については、城壁の調査において、西晋代の銭文陶器片が出土したことにより3世紀末かとされたが、現在では4世紀以後、風納土城よりも遅れるとみられている。自然丘陵を用い、稜線に沿って高さ



を調節するために版築する。城壁に石灰の痕跡が残り、『三国史記』にみえる「蒸土築城」という語に結び付けている。現在の地表面から高さ6～13mで、幅は40mを越えるところもある。周長は2285mである。当初、木柵で城壁を補完したというようなみかたがされ、現在も一部復元しているが、その後の調査で造営時の永定柱の痕跡であるとみるようになってきた。2013年から漢城百済博物館附設百済学研究所が発掘を再開し、現在もつづいている。北門の外から、内側の生活空間で、475年にこの地に入った高句麗の道路も確認されている。

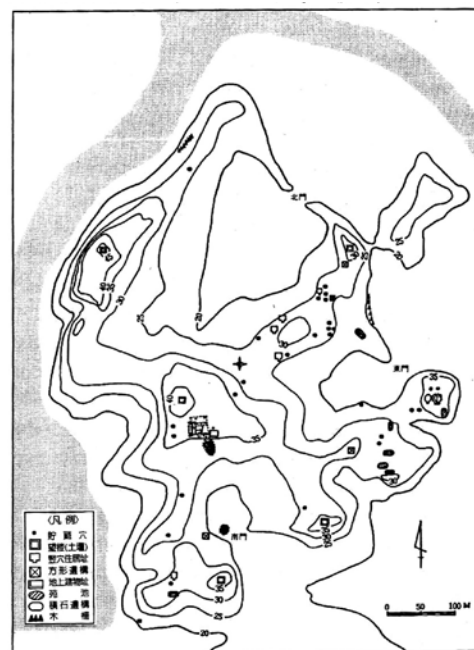
中期王都熊津の王城である公山城は、錦江に面し、周長が2660mあり、土城部分が735m、石城部分が1925mである。

『新增東国輿地勝覧』巻17・公州牧・城郭条に「公山城」がみえ、注に「州の北二里にある。石築。周四千八百五十尺、高さ十尺。中に井三・池一がある。また軍倉がある。○地元の言い伝えでは、これは百済時代の古城で、新羅の金憲昌が依拠したところである、という」とある。

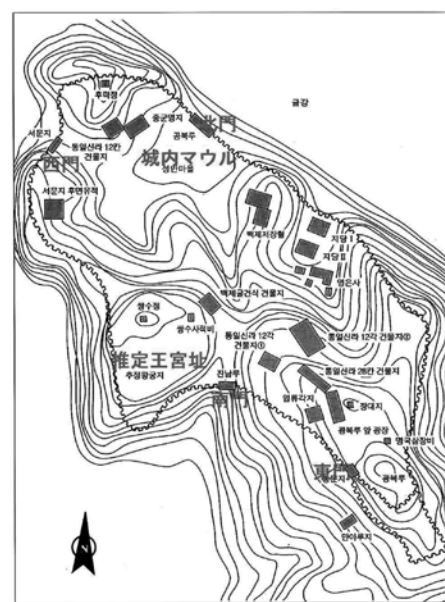
ただし「これは百済時代の古城であるといい伝えている」とする程度で、金正浩『大東地志』にいたって「百済の聖王四年に熊津城を修築したというのがこれである」というように、公山城を明確に熊津城としている。

その後も、公山城が王城であったとみなされてきたわけではない。関野貞も、この地を訪れて城内から扶余の扶蘇山城出土のものと類似する土器片・瓦片を見て、「これは正しく熊川時代の山城であることを始めて推定することが出来て、非常に愉快に感じた」とする程度であった（『百済の遺跡』『朝鮮の建築と芸術』）。今西龍も、公山城を就利山城と混同していたようで「就利山はもと王宮址と伝ふる江辺なるが恰も扶餘に於ける扶蘇山に似たり。此の地には何等の遺物なきものの如し。……新羅王朝時代、王氏高麗時代を通じて今日に至るまでの重要な政治的都市たるにも拘らず、遺物・遺跡の見るべきもの多からざるは遺憾とす」（『百済都城扶餘及び其の地方』『百済史研究』）としている。公州において百済遺跡の調査を進め、公山城が百済の王城であることを明確にしたのは、軽部慈恩であったといえる（『百済遺跡の研究』吉川弘文館、1971）。

公山城の発掘調査は、1980年に公州師範大学（のちに公州大学校）百済文化研究所が実施したのが最初であり、同校博物館（現、歴史博物館）がつづけている。王宮の位置は、城外説もあり、明確ではないが、城内では最も平坦な双樹亭前の広場を有力候補地と位置づけている。近年の城内マウルの調査において、百済時代の15棟の建物址や、貯水施設・竪穴遺構・道路・排水路・鉄器工房址などが検出されているが（統一新羅時代の建物址も7棟）、6号建物址と7号建物址のあいだに広場があり、や



夢村土城内の遺構分布図（特許『百済国家形成過程の研究』六一書房、2003）



（図10）公山城 城内マウル試掘調査（『公山城 城内マウル試掘調査』公州大学校博物館、2008）

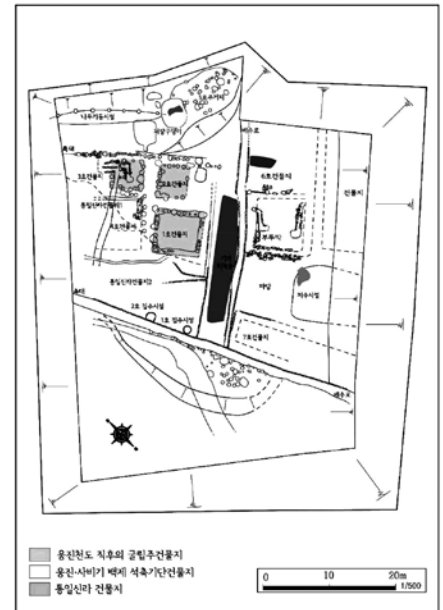
や特異である。6号建物址は、南向きであるが、軸を30度ほど東に振っている。石築の基壇が二重になっており、下段は正方形に近く、一辺約8.5mである。上段には南北760cm、東西630cmの建物基壇がある。壁は、ほかの建物は大壁建物であるが、これは柱穴列は確認できず、瓦片や礎石様の石材もあって、礎石建物であった可能性がある。東西にL字形の煙道がある。このあたりは、王宮に関連する施設と考えられている（李南奭・李賢淑『公山城城内マウル第4・5次発掘調査 公山城王宮関連遺蹟』公州大学校博物館、2016）。

公山城の城壁は現在、石築の部分が多いがそれはほとんど後代の修築によるもので、ほんらいは土築であろう。土城は東門址の外側に少し残っているが、それが百済時代の築造と確認されている（安承周・李南奭『公山城城址発掘調査報告書』公州大学博物館・忠清南道、1990）。ただし2012年の調査では、その点が明確にはならず今後の課題といえる。

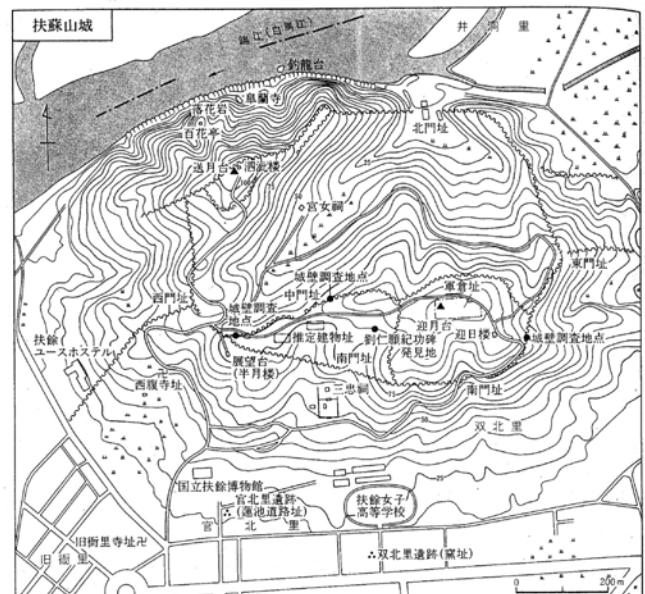
最後の都となった泗沘（扶余）には、街の北側に扶蘇山城がある。1981年に国立文化財研究所・忠南大学校博物館・国立扶余博物館によって軍倉址など城内の発掘がはじまり、現在まで調査がつづいている。1988年からの1991年にかけては、国立文化財研究所によって東門址附近が発掘された。その結果、従来、東門址と考えられていた箇所は、百済時代には土塁が連続しており、後代（統一新羅時代）になってそこを開口して門にしたもので、百済時代の東門址はそれよりも95mほど離れた北側の下層で検出された。このように、百済時代の築造以後、統一新羅時代において、単なる補修程度ではない改造があったことが確認できたことは重要であり、逆に、発掘を経ていない地区の城壁・門址等について、外見のみで単純に判断できないことの警鐘となる。

百済時代の東門址から南側に10m離れた土城内側の瓦積み層である赤褐色粘土層で、「大通」という刻印のある瓦片が2点発見された。「大通」銘刻印瓦は、公州市内の大通寺址でも発見されており、そこが文献にもみえる大通寺址であることを示す最も有力な根拠になっていたものである。「大通」はそもそも梁の年号で、527～529年の間に使用された。「大通」が寺名ではなく、年号を示すすれば、遷都よりも10年ほど前となり、城壁が遷都に先立って築造されていることを示す資料になる。

全体は包谷式山城で、約2200mある。それを内側で区画する山頂式山城が2つある。北にあるものを泗沘楼山城とよび周長約700m、南にあるものを軍倉址山城とよび周長約1400mである。ところで、東門址よりも西側の、包谷式山城と、軍倉



【圖 5】성안마을유적 4차조사 유구배치도





〈도면 1〉 泗沘都城의 面構造 (朴澤發)

址山城との接合部分の発掘調査の結果、包谷式の山城が百済時代に最初に築造され、山頂式山城の築造時期は、部分的に一～二段階遅いとわかった。近年の発掘でもおよそそれが裏づけられているが、泗沘倭山城の一部が百済にさかのぼる可能性も指摘されている。

この王都には、羅城が築かれている。扶蘇山城から東に延び、以前に青山城とされていたところで南に折れ（ここまでを北羅城）、山を越えて陵山里寺址の西側を通り、さらに山を越えて錦江河口近くまでつづく（これを東羅城）。かつては扶蘇山城から西に延びる西羅城や、南の山の上に延びる南羅城も想定することがあったが、現在は、西羅城については認める研究者も

いるが、なかったとみるほうが多く、南羅城はなかったとされるようになった。北羅城や、東羅城の陵山里寺址の西側は発掘され、外側には石築があり、芯の部分は土塁であるというのが基本である。

これ以外の山城について益山（全羅北道）を例にしたい。益山には、王宮里遺跡があり、7世紀前半の離宮とみられるため、まったくの地方ということではない。そこにおける山城をみると、まず益山土城（五金山城）があり、円光大学校馬韓百済文化研究所が1980年と1984年に城壁試掘調査と南門址の発掘調査をし、その後、2016年になって城内の試掘調査、つづけて2018年にかけて4次にわたって発掘調査をしている。「北舎」銘土器や「首府」銘の印章瓦など7世紀百済の遺物が出土している。



〔『金馬猪土城』全北文化財研究院, 2019〕

知られていなかった西門址も発見されたが、統一新羅時代に廃棄されたこともわかった。周長690mである。また、その東側に金馬猪土城がある。金馬猪という歴史的地名があり、それをまちがえて金馬猪・金馬猪・金馬都などと書き、金馬が脱落して、猪土城・堵土城・都土城などわけのわからない名称になっている。周長370m。1991年と2017年に発掘され、版築土塁と列石がみられる。百済山城の基本形態といえるもので、日本の古代山城の特徴に通じるものである。列石前に柱穴があるが、築造に際して必要であったもので、柵を立てるわけではない。日本でも多く検出されている。

知られていなかった西門址も発見されたが、統一新羅時代に廃棄されたこともわかった。周長690mである。また、その東側に金馬猪土城がある。金馬猪という歴史的地名があり、それをまちがえて金馬猪・金馬猪・金馬都などと書き、金馬が脱落して、猪土城・堵土城・都土城などわけのわからない名称になっている。周長370m。1991年と2017年に発掘され、版築土塁と列石がみられる。百済山城の基本形態といえるもので、日本の古代山城の特徴に通じるものである。列石前に柱穴があるが、築造に際して必要であったもので、柵を立てるわけではない。日本でも多く検出されている。



도면 1. 益山山城의 面構造 및 주변유적 분포도(全北文化財研究院, 1:500,000)

4. 新羅の山城

新羅は、現在の慶州盆地に発祥し、滅亡の935年まで、一度も中心地を遷すことがなかった。王城は月城であり、周囲に山城を配している。

新羅の王宮は、基本的に月城にあった。『三国史記』巻34・地理志1に、

当初、赫居世二十一年（前37）に宮城を築き、金城と名付けた。婆娑王二十二年（101）に金城の東南に城を築き、月城と名付けた。または在城と号した。周長一〇二三歩である。新月城の北に満月城がある。周長一八三八歩である。さらに新月城の東に明活城がある。周長一九〇六歩である。さらに新月城の南に南山城がある。周長二八〇四歩である。始祖以来、金城にいたが、後世になると、多く両月城にいるようになった。

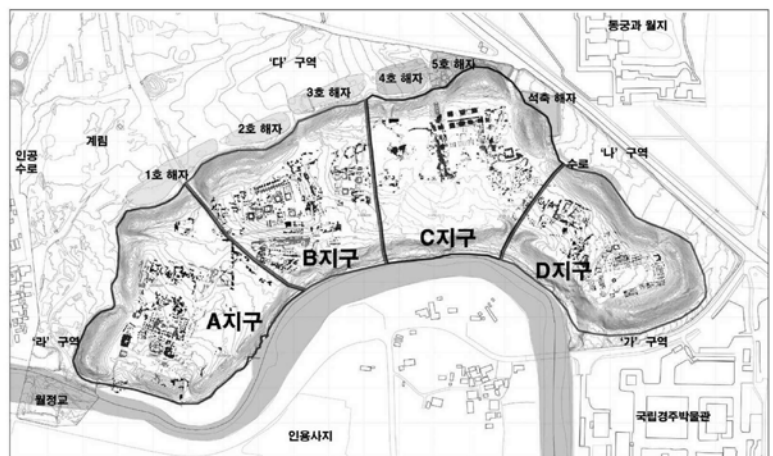
ここには、宮城として金城・月城がみえており、月城も新月城と満月城に分かれると記している。そして、王は始祖の赫居世以来、金城にいたが、婆娑王の時（101年）に月城を築き、その後は両月城にいたようになった、というのである。

しかしこの記事には、疑問がある。『三国史記』冒頭の巻1・新羅本紀1・赫居世21年（前37）条に「京城を築いた。金城と名づけた」とある。ここには、先の地理志とは異なり、金城を京城のことであると記している。京城とは王都全体のことであるが、宮城はそうではなく、王宮を指すとみるべきである。従って、地理志と新羅本紀の説明が大きく異なることになる。『三国史記』において、すでに混乱があるのである。実態としては、王都全体すなわち京城を金城とよび、宮城を月城とよんだと考えられ、つまり新羅本紀の叙述が正しい。おそらく『三国史記』の編者は、金城と月城との違いについて、よくわかっていなかったと考えられる。

なお、上記の地理志の記事に「または在城と号した」とあるが、月城からは、「在城」銘の瓦が多数発見されている。「在城」とは「王の住まわれる城」の意で、実態に即した呼称といえよう。

始祖の時代、すなわち国の最初から、王都があるのは必然である。伝説上の建国年代を別にして、具体的に「建国」の絶対年代がいつであるのかは、新羅史の理解の上では重要であるが、ここで必要なことは、月城の築造年代である。以前は、上記の婆娑王の記事をそのまま認めて101年築造としてきたが、わたしはずっとそれに反対してきた。新羅本紀3・炤知麻立干9年（487）条に「秋七月、月城を修築した」とあり、翌年に「春正月、王が月城に移居した」という記事があるが、それこそが実際に、月城を王宮としたはじまりであると考えていた。しかし実際には、それよりも先行することが近年の発掘調査で確認された。

月城の規模は、報告者によって数値が一定しないが、およそ東西900m、南北260mで、面積は6万余坪。南面は、南川が自然断崖をなしており、ほとんど城壁をつくっていないが、そこを含めて周長約2400mという。城壁は土石



(『新羅千年の宮城 月城』2017 国立慶州文化財研究所)

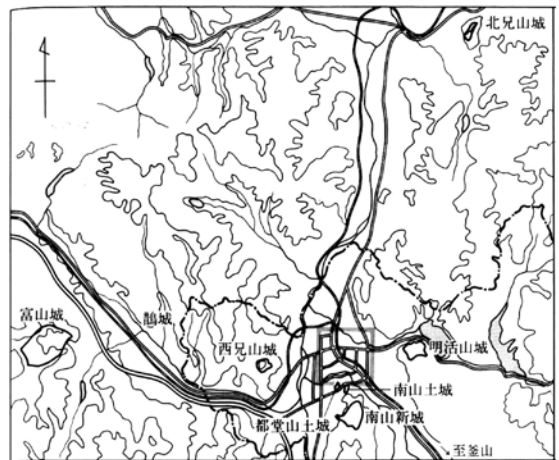
を混ぜて突き固め、上を粘土で覆ったもので、高さは10～20mある。城内は平坦で、ここに宮殿が並んでいたはずである。2007年にレーダー探索（物理探索）によって、およその遺構配置はわかった。その後、2014年から城内の発掘が始まり、現在に至っている。

A～Dの四地区にわけて年次的に調査が進行している。最初に発掘されたC地区の調査では、17基の建物址、それに重複する九基の建物址が確認され、合計26基の建物址が確認された。それが、殿舎の建物のように、東西建物と南北建物が配置されており、王宮に関連する建物のようにみられる。ただ、今後つづく、全体の発掘を通して考えられなければならない、すこし先のことになる。

月城城壁や城内の調査に先立って、南側の南川に面したところは別にして、周囲の堀（垓字とよぶ）の調査が行われ、その造営時期が5世紀後半であることがわかった。その後、2014年以後、城壁の調査も進み、4世紀に開始され、400年を前後する時期に完成したのが最初であると考えられるようになった（『月城西城壁発掘調査資料集』国立慶州文化財研究所、2021）。北側の垓字は、7世紀末に埋められ垓字としての役割を終えている。東北の一部は、東宮への通路として、護岸石築が作られ造景化した。7世紀後半に月城の性格が変わったことを意味している。

西南部の月城城壁調査によれば、城壁は地山の上に築かれている。これまで自然丘陵を利用し、低いところを補うだけであったとみていたものが、基礎からすべて築されていることが確認されたのである。城壁調査は進行中で、ほかの地区でもそうであるのか、全体的に造られた丘陵であるのかどうか、今後の調査を待たなければならない。

月城周囲の状況についてみれば、南には南山があるが、その北端に都堂山土城と南山土城がある。それらの南側に南山新城が築造された。これまで10点発見されている「南山新城碑」によって591年築造が確定できる。それに先行して、東に明活山城が造られているが、この場合にも、土城が以前からあったようである。西には西兄山城がある。羅城をもたない新羅都城は、これら周囲の山城が防御に重要な役割をはたしている。明活山城は、近年、北門址附近と城壁の一部が発掘調査された。7世紀以後の遺物がほとんどみられず、その頃には廃棄されたのではないかという意見もある。647年の毗曇の乱に際に反乱軍がここに駐屯し、月城の王軍と対立している。そのことと関わりがあるのかもしれない。



新羅の典型的な山城として知られているのが三年山城であり、忠北報恩郡にある。歴史的にも重要である。470年の築城記事があり、それに従っている。稜線に沿って築造した包谷式山城で、周長1680m。土砂を交えず純粋に石材のみで、板状割石を用い、横口積みと井字形の小口積みを併用して垂直に積む。

5. 朝鮮三国の山城と鞠智城

ここまで朝鮮三国の山城についていくつか例示しながら述べてきたが、簡単に整理すれば、高句麗は山城による領域支配を貫徹した。山城自体に居住性はなく、山麓や近傍に別の城を築き、両者あい

まった拠点を形成した。大型山城が多く、石築・土築ともにあり、技術的には朝鮮三国山城の基本となっている。それに対して百済は、土築の山城が一般で、規模も小型である。城壁はとうぜん版築土塁であるが、下部前面に石を積み上げるもの（列石）がある。新羅は、高句麗山城の影響を受けた部分もあり、石築・土築ともに多いが、列石はみられない。

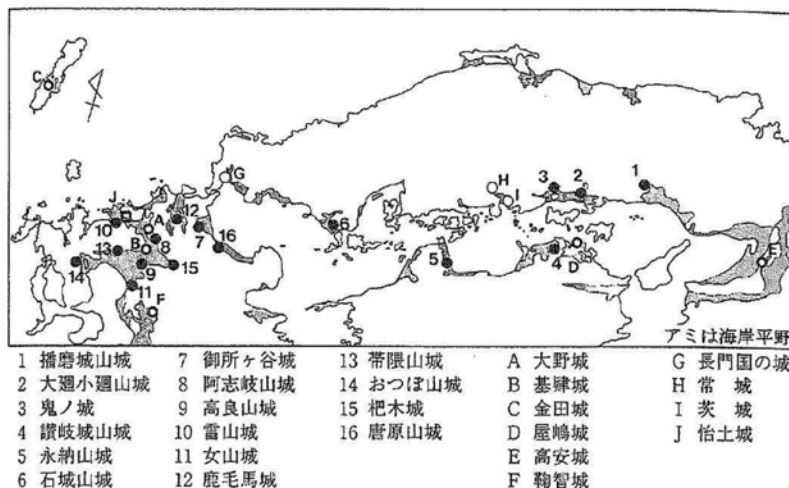


図3 西日本の古代山城分布図

(向井一雄『よみがえる古代山城』)

古代山城構造比較

(向井一雄「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡Ⅱ』奈良文化財研究所、2004)

	山城名	所在地	周長(km)	標高(m)	最低比高(m)	外郭構造					列石・石材							城門		類型
						土築・石築	形状	折・曲	版築	水門	列石	石材加工	石材供給	被覆・露出	置き方	段差調整面	列石前柱(有無・間隔m)	城門	門礎	
1	播磨城	兵庫県たつの市	1.8	458	350	石?	内托	折?		石	野面	現地	被覆	露	×	×	○?	凹型	遺地1外郭1-b	
2	大瀬小瀬	岡山県岡山市・瀬戸町	3.4	198	64	土	内托	折	○	石	野面	現地	被覆	露	×	×	○?	凹型	遺地1外郭1-b	
3	鬼城山	岡山県総社市	2.8	403	230	土・石	突築	折	○	石	野面	現地	露出?	露	×	○3.0	○	凹○型	遺地1外郭1-a	
4	讃岐城山	香川県坂出市・丸亀市	6.3	462	270	石・土	内托	折		石	野面	現地	被覆	露	×	×	○	凹型	遺地1外郭1-b	
5	永納山	愛媛県西条市	2.5	128	15	土	内托	折		石	野面	現地	被覆	露	×	○3.0	○	凹型	遺地1外郭1-b	
6	石城山	山口県光市・田布施町	2.5	350	230	土	内托	折		石	野面	現地	被覆	露	×	○2.19	○	凹型	遺地1外郭1-c	
7	御所ヶ谷	福岡県行橋市・藤山町・藤川町	2.9	247	75	土	突築	折?		石	野面	現地	被覆	露	×	○1.8	○	凹型	遺地1外郭1-a	
8	宮地岳	福岡県筑紫野市	2.8	339	98	土	内托	折	○?	石	野面	現地	露出?	露	×	×	○?	凹型	遺地1外郭1-c	
9	高良山	福岡県久留米市	2.7	252	35	土	内托	曲	○?	石	野面	現地?	露出	露	×	×	○?	凹型	遺地1外郭2	
10	雷山	福岡県前原市	2.3	483	300	土・石なし	(内托)	折		石	野面	被覆	露出	露	×	×	○	凹型	遺地1外郭2	
11	女山	福岡県瀬高町	3.0	202	4	土	内托	曲	○	石	野面	被覆	露出	露	×	○3.0	○	凹型	遺地2外郭2	
12	鹿毛馬	福岡県藤田町	2.2	70	0	土	内托	曲	○	石	野面	被覆	露出	露	×	○3.0	○	凹型	遺地2外郭2	
13	帯隈山	佐賀県佐賀市	2.4	174	9	土	内托	曲	○	土・石?	野面	被覆	露出	露	×	○3.0	○	凹型	遺地2外郭2	
14	おつぼ山	佐賀県武雄市	1.9	66	0	土	内托	曲	○	低石	野面	被覆	露出	露	×	○3.0	○	凹型	遺地2外郭2	
15	杷木	福岡県杷木町	2.3	130	8	土・石なし	(内托)	曲	○?	土・石?	野面	被覆	露出	露	×	×	○	凹型	遺地2外郭2	
16	唐原	福岡県上毛町	1.7	73	0	土・石なし	(内托)	曲?		土・石	野面	被覆	露出	露	×	×	○?	凹型	遺地2外郭2	
A	大野城	福岡県太宰府市・宇美町	6.5	410	140	土・石	突築	折?	○?	石	野面	現地	被覆?	露	×	○1.6	○	凹型	遺地1外郭1-a	
B	基肄城	佐賀県基山町	4.4	416	130	土	突築	折?		石	野面	現地	被覆	露	×	×	○	凹型	遺地1外郭1-a	
C	金田城	長崎県対馬市	2.8	276	27	石	突築	折?		石	野面	現地	被覆	露	×	×	○	凹型	遺地1外郭1-a	
D	屋嶋城	香川県高松市	4.0	292	260	石	内托	折?		石	野面	現地	被覆	露	×	×	○	凹型	遺地1外郭1-b	
E	高安城	大阪府八尾市・奈良県平群町	4.8	488	17	土?	内托?	折?		石	野面	現地	被覆	露	×	×	○	凹型	遺地1外郭1-b	
F	鞠智城	熊本県山鹿市・菊池市	3.7	169	45	土	突築?	折?	○?	石	野面	現地	被覆?	露	×	○1.8	○	凹型	遺地1外郭1-b	

日本の古代山城の多くは、百済的であるとされる。『日本書紀』天智4年（665）条に、

秋八月、達率答炆春初を遣わし城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣わし大野及び椋（き）の二城を築かしむ。

とあるように百済官人を派遣して築城させており、関係は明白である。達率という高位の官位をもつような高官が築城技術を持っていたとは考えられず、工人たちを従えて指示をしたということであろうが、百済技術であることは問題がない。記録のない多くの古代山城も、そのような百済山城の特徴と合致するといえる。

そうしたなかで、鞠智城はやや特異かもしれない。ほかの古代山城に共通する特徴をもちながらも、低い丘陵に立地し、調査の進展にもよるが官衙建物も多く、機能的に異なる点があるようである。ただし、漢城時代の夢村土城なども、似たような特徴を持っており、鞠智城が百済山城の類型から大きくはずれるということではない。